

改めてハマースを考える

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

1. 事件が起きた日と年

ガザに拠点を置くイスラーム主義組織ハマースが、10月7日土曜日にイスラエル市民に対して大規模な軍事行動を起こした。当然、イスラエル側から見れば、一般市民を対象とした許しがたい無差別テロ行為である。その日は、ユダヤ教のシャバト（安息日）で休日だったため、大規模なフェスティバルが開催されていた。その休日は「律法感謝祭」と呼ばれ、ユダヤ教徒が一年かけてモーセ五書（ヘブライ語ではトーラー（律法）と呼ばれ、キリスト教の旧約聖書では創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記までを指す）を読み終える日であり、また新たに一年かけて律法を読み始める日でもある。

同時に、今年2023年はイスラエル建国の1948年から75周年という年でもある。しかし、この事件はパレスチナ人の側からは「ナクバ（大災害）」と呼ばれており、故郷パレスチナを追放されて難民となった75年目にも当たる。

この攻撃でイスラエル側の犠牲者は少なくとも1400人以上に上ると報じられている。イスラエルでは近年に例をみない最悪の死者数である。イスラエル国民の怒りは、リクード党のベンヤミン・ネタニヤフ首相に緊急挙国一致内閣の組閣へと導いた。イスラエル側からすれば、「イスラエル・ハマース戦争」と西側メディアが喧伝する戦争を遂行するためである。

改めてハマースを考える

2. ガザという場所

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

ガザ地帯は南北の全長が約41km、東西の幅が約10kmの長方形で、その面積は365km²しかない。日本でいえば、種子島よりも狭い場所に、名古屋市ほどの人口規模である約230万人ともいわれるパレスチナ人が住んでいる。過密な人口に加え、許可がないとガザからの出入りは自由にできないために、ガザは「天井のない牢獄」と呼ばれてきた。

ガザにも多くの自動車が走っているが、そのような中で同時に目立つのが荷車をひくラバの姿である。馬とロバをかけ合わせたラバは、ロバの粗食に耐える丈夫さや忍耐力、馬の力強さといった両者のもつ長所を受け継いでいるという。だからこそ、ラバはガザでも多く見かける。ガザの街の市場などの雑然とした活気とは裏腹に、ガザでは低い見積もりでも失業率が人口の45%以上もあり、二人に一人の割合で職がない。そのため、若者の多くがやることもなくアラブ式のゲームで遊んだり、お茶を飲んだりして、ガザの街々に数多くある喫茶店でたむろしている。かつて私が訪問した時の街の光景である。

イスラエルへのパレスチナ人の出稼ぎは約15万人といわれるが、イスラエル側のセキュリティ強化の問題もあって、正式には若年層のパレスチナ人労働者はイスラエル労働市場で働くことは認められていない。しかし、建設業を中心に「非合法労働者」としてイスラエル労働市場でいわゆる「3K」の業種で働くパレスチナ人も多いのもたしかである。ところが、近年ではフィリピンを中心とする東南アジアからの労働者がパレスチナ人に代わってイスラエル労働市場で働いているのが現状といってもよく、ガザの窮状はいよいよ限界値に達しようとしていたといってもいいだろう。

改めてハマースを考える

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

3. ハマースという政治組織

ハマースというイスラーム主義政治組織は、「イスラーム抵抗運動(Harakat al-Muqawama al-Islamiyya)」というアラビア語の頭文字(H-M-S)をから作られた略称であり、アラビア語では「熱狂」という意味をもっている。今回のハマースによるイスラエルへの攻撃に至る背景を考えるためには、ハマースの歴史を振り返ってみる必要がある。ハマースがなぜガザで支持されているかの理由を考えるためである。

そもそも、ハマースの起源はムスリム同胞団である。その同胞団は、エジプトのスエズ運河沿いの都市イスマイリヤで1928年に設立され、1948年のイスラエル建国後、エジプト支配下（1948～67年）のガザではパレスチナ支部として活動が続けたのである。現在のハマース自体は1987年の第一次インティファダ（民衆蜂起）の勃発直後、当時のガザのイスラーム運動の精神的指導者であったアフマド・ヤースィーン（ヤシン）師によって設立された。車いすに乗った指導者として知られる同師は2004年にイスラエルのミサイル攻撃によって殺害された。

改めてハマースを考える

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

3. ハマースという政治組織

（続き）現在の指導者は1962年に前述のシャティー難民キャンプで生まれ育ったイスマール・ハニーヤである。ハニーヤは現在、家族とともにアラブ湾岸諸国の一つカタールのドーハに滞在している。したがって、ハマースとアラブ諸国との関係を考えるうえで重要な役割を果たしているのがカタールである。

カタール政府は、イスラエルが2008年末から2009年初めにかけてガザを攻撃して以来、イスラエルとの外交関係は途絶しているものの、イスラエルとのつながりを完全に断ち切ったわけではなく、今回もハマースに捕らえられた人質の釈放などを通じて両者のあいだを仲介する重要な役割を果たしていると報じられている。

改めてハマースを考える

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

4. ハマースのオスロ合意への反対

ハマースは1993年9月にイスラエルとPLO（パレスチナ解放機構）とのあいだに結ばれたパレスチナ暫定自治に関する原則宣言（オスロ合意）締結の正当性を認めていない。したがって、オスロ合意で5年間と設定された暫定自治の期間であってもイスラエル側への武力攻撃をやめなかった。

結果的にイスラエル側は治安が確保できないことを理由に、将来の「パレスチナ国家」となるべきヨルダン川西岸・ガザの土地のほんの一部、それも点と線を結んだような領域しかパレスチナ側に返還しなかった。

そんな停滞する和平交渉が大きく動いたのは、対パレスチナ強硬派とされていたアリエル・シャロンが与党リクード党を離脱して、2005年にカディーマ（ヘブライ語で「前進」）党を新たに結成して政権を獲得してからであった。シャロンはそれまでは軍人出身の政治家として「超タカ派」とみなされていたにもかかわらず、世論の反対を押し切って2005年にはガザからイスラエル国防軍を撤退させた。しかし、2005年末、シャロンは脳卒中で倒れ、85歳でその生涯を終えた。以後、ガザはハマース支配下に置かれることになった。

改めてハマースを考える

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

5. ハマース支配下のガザ

われわれのイメージするハマースは、アメリカなどの西側諸国が「テロ組織」と指定しているため、武装集団として危険な政治組織としてみなされがちである。しかし、実際にはハマースがガザのパレスチナ人の若者の多くの支持を受け、動員できているのは、ハマースが政治部門や軍事部門のみならず、社会福祉部門ももっているからである。イスラエルによる封鎖によって経済的な困窮を余儀なくされたガザ地区の窮乏した人びとにとって、ハマースはその組織的な母体であった「ムスリム同胞団」と同じように、イスラームの相互扶助の精神に基づいて「慈善団体」としての性格をもっているからである。ハマースには医療・教育・食糧支給の面で社会福祉の活動も長い間、行ってきた実績がある。そのため、ハマースはとりわけ貧しいパレスチナ難民に信頼・支持されている。

すなわち、ハマースの慈善団体としての精力的な救貧活動も念頭に置かなければ、ハマースがなぜガザのパレスチナ住民の多くに支持され、パレスチナ人の若者たちが死を賭してまで自爆攻撃のような軍事的行動を行うのか理解できない。

改めてハマースを考える

臼杵陽（日本女子大学教授・パレスチナ研究）

5. ハマース支配下のガザ

（続き）ハマースの軍事部門のグループは「カッサーム旅団」と呼ばれている。カッサームという人物はパレスチナ人であれば誰もが知っている歴史的なヒーローの一人である。シャイフ・イッズディーン・アル・カッサーム（1982～1935年）とパレスチナ人が呼ぶ人物は、イスラエル建国前の1935年11月に対英・対シオニストの軍事行動を行って殉教してシャヒード（殉教者）となった、北部シリア出身のイスラーム教指導者である。

カッサームはエジプトのカイロにあるイスラームを学ぶための最高学府であるアズハル大学出身のシャイフ（アズハル卒業生に与えられる称号）である。イスラーム的な深い学識に基づいて、カッサームは現在のイスラエル北部の港町ハイファにあるイスティクラール・モスク（アラビア語で「独立礼拝所」という意味）でイマーム（導師）を務めていた。イマームとは礼拝の際に先頭に立って礼拝を主導する宗教者である。カッサームはハイファに拠点を置いてパレスチナで初めてイスラームの名の下に武装闘争を開始したことでパレスチナ人のあいだで広く知られて尊敬を集めている人物である。

ハマースがイスラエルに対して数多く打ち込んでいるミサイルも「カッサーム・ロケット」と呼ばれることにも、カッサームがハマースのメンバーによって、ある意味では「神格化」されており、従うべきロールモデルとして崇敬されているからである。以上のようなハマースの歴史を踏まえて今回の事態を見ていく必要がある。